

無毛青年ワンパンリズム

ホルスの翼神竜1v10

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立愛地共生学園この学園にはある噂があったのだった…

アニメ見たら書いてみたくなったので書いてみました！

作者はアニメしか見ていません

思いつきなので内容がチグハグだったりするかもです

かなりのキャラ崩壊やご都合主義があります

かなり色々酷いのでそれでも良い方のみどうぞ！

目次

第3話	第2話	第1話
7	4	1

第1話

私立愛地共生学園ここは元々女子高だった。

しかし、共学になるに伴い男子という今まで知らなかった者達が入ってきたのだ。

その事で、恐怖を感じた女子生徒のため「天下五剣」という組織が作られた。

そして、ここにある1人の男が転校してくる事で物語が動き始める：

??? 「ここだなあ俺の新天地は、今度こそ平穩にやれることを祈るぜえ」見るからにかかるそうな男この男の名を「納村 不動」という

納村 不動「うお!? なんだあここは?」

納村「武装女子ばつかじやねえか：どうなってんだ?」元々、女子高だったためか女子の方がかなり多い、一見すればハーレムワツシヨイかも知れないがこの学園はそんな甘いものでは無い…

その頃、五剣会議室

「揃ってるようだな」顔の半分を鬼の面で覆っている黒髪の少女名を「鬼瓦 輪」(おにがわら りん)

「oui (はい)、あなたで最後でしてよ」金髪の高貴な令嬢のような雰囲気所謂金髪ドリルの女性名を「鶴亀城 メアリ」(きかくじようめあり)

「えくと、珍事?」少し明るい緑の髪に何を考えてるか分からない目をしている某奇跡を起こす巫女に似ているような似てないような女性名を「眠目 さとり」(たまば さとり)

「応さな。希な顔がおる」メアリと同じく金髪だがかなり小さい形をしていて少し古風の喋り方をするようj ゲフンゲフン少女名を「花酒 蕨」(はなさか わらび)

「槍玉なんてガツカリです。 そんな事のために集まったのですか?」可愛らしいツインテールに透き通るような銀髪そして肌、更に高校にいる子にしては小さな体まるで人形のような印象を受ける少女名を「因幡 月夜」(いなば つくよ)

以上の5人が天下五剣のメンバーなのである。

そして、現在在校生の中で最も強い5人だ

この5人にもみ帯刀も許可されているのである

輪「いいや、我々天下五剣がこの五剣会議にて話し合う議題は主に二つ」五剣会議ではこのように転入生について調べ対策をねるのが決まりらしい

輪「外敵つまり転入生の対処」

メアリ「基本的にはいつものパターンと同じですわね」

メアリ「前の学校で乱闘騒ぎを起こし退学、ただ今回はその規模が大きくてよ」

輪「重軽傷合わせて40人以上、獲物については何か分からないが間違いなく何か武術をやっているな」この五剣会議で転入生を警戒するのはなかなか珍しいことなのだ

輪「ただし、本人が一番重症だったらしく最近まで入院している」

蕨「素手でそれをやったなら脅威じゃが、どちらにしる妾達の敵ではない」

蕨「であろう?」

キョーボー(熊)「グアオオオオ!!」

さとり「ねーねー、蕨ちゃん! その子もう一回触らせて!」

キョーボー(熊)「クウウン」

蕨「控えよ。そちは動物の愛で方が自分本位過ぎる」

輪「おい! こっちに集中しろ!」

さとり「ん? ちゃんと聞いているよ?」

さとり「そののうむらだっけ?」

「のむらだ。 アクセントは頭につけてやると良い 喜ぶぞ?」長い黒髪、真つ黒な瞳、黒い制服、全体的に黒いこの女性名を「天羽斬々」(あもう きるきる)

天羽が話に加わり新しい転入生についての忠告をされた後五剣たちはもう一つの話について話し始めた

メアリ「そういえば輪さん、話し合うのは二つと言ってましたがもう一つは何ですか?」

蕨「そういえば、言っておったのう。ほれ早く話さんかまさかまた転入生などと言うわけではあるまい？」

輪「ああ、そうだったな。もう一つの議題はあの噂についてだ」
月夜「まさか、あんな噂を本気にしてるのですか？ ガツカリです。」

輪「しかし、もし本当であった場合とても重要な問題となる。

よって、あの噂が本当か嘘か分かるまでは調査を強化して行こう！」

メアリ「確かに本当ならこの学園を脅かす程のことですが……」

蕨「くだらんのう。そんな事に割く時間などないと言うのに、じやがまあ、下の者にでも調査はさせてみるかのう」

さとり「ん、私は遠慮しとくね。」

そんなつまらない事したくないし〜」

月夜「私も遠慮します。せつかく会議に出たというのに最初の話しならともかく居もしないものの事を調べるなんて無駄です。本当にガツカリです。」

輪「仕方ない、協力出来るものはできるだけしてくれ。今の所、一番重要なのは今回の転入生の方だからな！」

輪「では、解散！……（確かに、あの噂は根も葉もない話かもしれないがやはり、調べなければなるまい。……4年留年した男サイタマ）」

第2話

納村「はあ……………」

納村は男子の姿が全く見えぬ女子からは警戒の目を向けられ続け精神的に少し疲れ始めていた

??? 「ちよつとあんた」

納村「んあ? ……うお!? 女装男子…?」

??? 「女装じゃないわよ、化粧よ」

突然声がかかったのでそちらの方へ視線を向けたのだがそこには濃い化粧で大きな顔を覆い見た目的にもかなり大きな某デラックスを思わせるような男が居た。

突然の出現に納村も思わず後ろへ下がった。

??? 「そんな事よりあんた新顔ね? ……なあに、その顔は?」

納村「いやなに、この学園には大仏様まであるのかと思つてな」

??? 「あるわよ! 講堂の中にね! ……こんなじゃなくてちゃんとしたのが!」

納村は相手から質問されたがその大きな顔を見て思わず

大仏みたいな顔のでかさだ…

と思ひ大仏デラックスさんを少し挑発してみた。その事に大仏デラックスさんは声を荒らげながら本物の大仏の場所を言った…自覚はあつたらしい…

納村「ありやりや…それでブツダ君?」

??? 「増子寺よっ!」

納村「えつと…ここじゃ豚くんみたいなのが多いのかい?」

増子寺「豚つて悪化してんじゃねえか!! 増子寺! ……増子寺 楠男

(ますこ)でら くすお)よ!!」

もう少しからかえるかと思ひ増子寺をからかうが流石に大仏デラックスではなく増子寺も激怒し

「誰が豚かあ!!」

と言ひながら納村を締め上げた。これには納村も

「分かった！ 分かったよ！ マスコ！」

と言ってからかうのをやめた。初対面の人に失礼すぎる男である。そしてそこから納村はこの男子は皆こんな感じであり大人しく皆のようにしていれば最低限の自由は保証されると教えられた。

だが納村は

「俺は自由と平穏を愛する男だぜ？」

と言ってその話を流した。

とあるアパート

プルルルルルル プルルルルルル

??? 「ん？ 誰だこの番号？ もしもし」

突然かかってきた見知らぬ番号に多少の不信感を抱きつつ電話に出ると

??? 「もしもし、サイタマですか？」

サイタマ「ああ。そうだけど誰？」

??? 「まさか、忘れたというのですか？」

サイタマ「あー、忘れた。スマン、それで何？」

??? 「イラッ 愛地共生学園の学園長 藤林 祥乃（ふじばやし ゆきの）です」

ここまで言われてもサイタマは全く覚えがなかった。そして、その態度のでかさに祥乃はかなりの苛立ちを感じていた。

サイタマ「へえーそうなんだ。 何？」

祥乃「ピキッ まだ分からないのですか？」

サイタマ「いや分かるわけないだろ。 人の心とか読めないし、てか早く要件行っていくね？」

祥乃「ピキッピキッ あなたという人は……ま、まあいいでしょう。

それで電話した理由ですが、あなたなぜ勝手に学校を抜け出したのですか？ あなたはまだ卒業していません。」

態度が更にでかくなりかなりイライラが溜まり始めた祥乃だったが怒りをぐつと堪え話を続ける。

サイタマ「は？ いや、俺そもそも高校生とかの年齢じゃねーし。 てか俺確か高校退学にされたような……？」

祥乃「貴方の退学は取り止めになりました。それを伝えるのにか
なり時間がかかりましたが。」

サイタマ「いやいや、ちよつて待てよ！」

今更言われたって無理だろ!? てゆーかならなんで退学なんて
言つたんだよ」

祥乃「あなたの言い分など知りません。退学になるような事をす
るほうが悪いのです。」

サイタマ「確かにそうだけど……俺退学になるような事してねー
し、まず何で今なんだよ、遅すぎだろーが」

ここまでかなり態度がデカかったサイタマも多少強引だが正論を
述べられると多少は委縮してしまう。

祥乃「5回も乱闘事件を起こしその上校舎に傷を相当数付け、授業
態度もあまり良くなく、成績も最低クラスこれのどこに退学させない
理由がありますか？」

逆にこんな生徒を残らせる方が他の生徒に対しての脅威になりま
す。そして、知らせが遅くなった件ですが、あなたに退学の知らせ
をしてから約3時間後にそれは取りやめになりました。なのにあ
なたはもう学園にはおらずその上連絡手段もない状態だったのです。
あなたの位置をつかむことが出来たこと自体が奇跡でしょう。」

サイタマ「スマン！ 話長すぎてよく分からなかった。もつと短
く簡潔にして」

ここまでの長いことを祥乃が口にするのは割と珍しいことであり
そこまでの話に話を理解していないサイタマに祥乃はいい加減怒
りが爆発しそうだった。

祥乃「ピキッピキッピキッ はあ……つまり、すべて貴方が悪い
ので早急に学園に來なさいという事です。」

サイタマ「いや、無理だろ」

何言つてんだこいつと言わんばかりにそう返すサイタマだった。

第3話

結局あの後祥乃に早く来いと口酸っぱく言われ一方的に電話を切られたサイタマは仕方なく準備を始めていた。

サイタマ「あ、そういえば……………」

準備をしてから気づいたのだが、あの高校の制服は家の中にも置くには邪魔だしもう着ることは無いだろうと言うことで

捨ててしまったのだった。

サイタマ「やべーな。 どうするかな、また口うるさく言われそうだな…まあ、でも、あっちの方から突然来たからな。」

仕方がないよな、うん。と自分に言い聞かせるように言いながら支度を続けるのだった。

そうして、支度が終わったサイタマは駅に向かって歩いてみると路地裏から3mはありそうなブルーメランパンツの大男が出てきた。

大男「こんな所にまだただの人間が居るとはな！ 余程のアホか実力者かあ？」

サイタマを馬鹿にしながら無駄に大きな声で喋りかけてきた大男にサイタマは

声でけーな、コイツ

と思っていたが祥乃からかなり急かされたのを思い出し少し急いでそいつの横を通ろうとした。

大男「おいおい、無視はねえだろう？ それとも、俺様のこのボディに恐れをなして逃げようとしたのかあ？」

ポーリングを決めながらドヤ顔でそう言いつつサイタマの前に立ちふさがる大男。それでもサイタマは特に何も言わずそのまま行こうとした時だった。

大男「一度ならず二度までも俺を無視するとは、お前は相当なアホのようだなあ！」

良いだろう！ そこまで言うのなら貴様に俺の真の姿を見せてやろう!! すうううう…はあああ…」

そんな迷惑な事を言いながら大男は深呼吸のようなものを繰り返

していると筋肉が段々大きくなっていき、呼吸が終わると先程よりも大きな体になっていた。

大男「グハハハハ!! どうだあ! これが俺の真の姿!! この姿を見せるのはお前が初めてだ! だから、貴様には俺の名を教えてやろう!!」

大男「俺の名はマッスル肉男《にくお》!!」

肉男はドヤ顔でそう言いながらポーズを決めた。

男の体が急に肥大化したので見ていたサイタマだったがさつきからポーズばかり決めていた肉男にだんだん苛立っていた。

サイタマ「もう分かったからさ、来るなら早くかかってこいよ。

時間ねえんだよ、こっちは」

肉男「……………そうか、なら今からお望みどおりてめえもプロテイン漬けてやるぜええ!!」

そう言いながら、その無駄に太い腕でサイタマに渾身の一撃を叩きつけるがサイタマは無表情のままだった。

(なんだとっ!? ならばっ!…)

ともう片方の腕を振りあげようとするが突然自分の腹に鈍い痛みが走り何が起きたのか分からないまま意識がなくなった。

サイタマはただ、軽く殴っただけなのだが肉男には見えていないので理解できるはずがなかった。

サイタマ「何だったんだ、コイツ。って、ヤベえ!! 早く駅に向かわないと! また、うるさい事言われちまう!」

肉男に時間を割いてしまったサイタマは時間が無いことに気づきそのまま急いで駅の方に走っていった。

学園サイド

納村は増子寺と会話を終えたあと職員室へとより先生から軽く話を聞いたあと何か少し引き止められた気がしたが、気にせずそのまま自身のクラスの2年13組へと足を運びそこから楽しい学校生活が始まる……………と思っていたが何故かクラスの武装女子達から武器を向けられて黒板の前に立たされていた。

輪「貴様は天下五剣が1人、この鬼瓦 輪が矯正してやる!」

納村「どうなってるんだこれ……」
特に何かをしたわけでもないのに武器をむけられひたすら困惑する納村だった。